

# 祈禱師リナの祈り

「レオ！」

リナの声が聞こえる。まだ眠いののにリナは朝から元気だな。  
目を開けてみると目の前に差し出されたのはゼンマイ時計。時間は…っってもうこんな時間！

僕の仕事、それは祈禱師。  
それは僕らの願いを神様に伝えるお仕事。  
世界が平和であるように。みんなが幸せであるように。  
今日も天を仰いで手を合わせる。

リナは僕の双子の姉。全然頼りにならなくて子供っぽい。まあ双子だからね。リナも祈禱師。普段は子供なりナも祈りの時だけはちゃんとした祈禱師だ。静かに天に手を合わせてるし、願いだってかなっている。

今日は村の結婚式に来ている。  
アルノーさん。あなたはこの者を妻とし、健やかなる時も、病める時も愛することを誓いますか？」  
リナが肩を叩いてきた。

「なんか飽きてきたねー」本当に祈らない時はほんと子供なんだから  
確かにみんなやること一緒で見慣れてきたけど  
飽きたって暴れだしそうなりナを隣にいる見習い祈禱師のリゼルと一緒に抑える。  
リゼルはまだ見習い祈禱師だけど祈りも通じるようになってきた。  
祈りの出番が来たらやっとならとしゃぐリナ。でも祈り始めると静かに夫婦の末永い幸せを願って手をあわせる。

この時だけはリナも真面目だ。

「おつかれさま！無事式終わったね。リナは…寝ちゃってる？」  
式が終わるとリナは寝ちゃっていた。  
「これがなきゃ完璧なのに、リナは」全く…。  
「まあそこがリナらしいとこだよ」それもそうか  
「ただもう少しわきまえてほしい時はあるけどね。この前のお葬式の時とか」  
『お葬式のこういう雰囲気苦手だな！』って元気よくリナが言うもんだからみんなの視線浴びてこっちまで恥ずかしかった

「祈禱師じゃなかったらつまみ出されてたよ。きっと」そう言って二人で笑いあった。  
そしてリゼルがため息をついた。これからまた修行のようだ。  
リゼルはまだまだだというけど、教会祈禱師になってもいいくらいだと思う。  
その時、扉が開いた。誰だろう？

リナと僕を探してるらしい。  
「ん～？だれ？」リゼルに起こされたリナ。ねむそう。  
「私、ヴィルテレット教会の修道士、アルベリヒと言います。」  
ヴィルテレット教会！…というと王都にあるこの国1番の教会…  
「長年祈りを捧げてきた祈禱師が病に倒れ他の祈禱師を探していたところあなたたち2人のことを聞きまして…どうか治していただきたいのです。」王都の教会か…。ずっと憧れていた。あの教会で祈りを捧げること。  
でもこの村のこともあるし…。  
「行っておいで、この教会での祈禱は私に任せて」リゼルがそう声をかけてくれて決心できた。

「ぜひ行かせてください。」  
僕たちは馬車に案内された。リナは初めて乗る馬車にテンション上がっていた。

## 祈祷師リナの祈り

僕たちがついたときにはもう、手遅れだった。

安らかな眠りを祈ると応接室に案内された。

「レオ、これから誰が祈祷師をやるの？」リナが聞いてきた。

もし決まっていなければやりたい。でも…ベルガノットもやっぱり心配だ。

そう思っているとリナがリゼルからもらったという手紙を見せてくれた。

『ミンジャンメルは私に任せて、二人は王都で精一杯祈りを捧げて！』

リゼルには背中押されてばかりだな。でもこの教会で祈りを捧げられるんだったら祈りを捧げたい。

アルベリヒさんが部屋に入って来て聞こうとした時この教会の祈祷師になってほしいと逆に頼まれた。

こうして僕たちは王都にあるこの国一番の教会、ヴィルテレット教会の祈祷師になった。

教会にある祈りの間で祈りを捧げていると国王のヴェンツェル5世が来た。

彼の話によるとこの前あの干ばつの街に雨が降り、皆喜んでいたらしい。ここに来た次の日に祈った祈りだ。ちゃんと叶ったんだ。

今祈っていたことを聞かれ、数日後の収穫祭に向けての豊作をと答えた。

すると国王は喜び教会の横にある大きな広場、モスノ広場を授けてくださった。

これからもより一層頑張らなきゃ。

「今日の夕ご飯なにかな」

祈祷が終わったリナの第一声がこれ。もうすぐ収穫祭だから美味しいものいっぱい食べれるとテンションが高い。だけど、僕は誰かさんのせいで毎年収穫祭の時あんまり食べれない。そう言ったらリナはふいっとそっぽを向いちゃった。でも自覚はあるんだね。

収穫祭の前日からものすごい豪雨だった。

畑とかも被害を受け、収穫祭はおろか史上最悪の不作だという。

今までベルガノットの教会で祈っていた時にはこんなことなかったのに。天気に関する祈りは一度も外したことはなかった。

今思うと何かが今と違ってたような…。

収穫祭の時外して以来調子が良かった。

「お兄さんたちは今日は何祈ったの？」

一人の少女が僕らに尋ねてきた。

「今日はジンボワニー地方で流行っている病気が治りますように。って」

リナにも興味津々で尋ねて来た。

「私は今日もこの街のみんなが幸せに暮らせますように…って。」

それを聞いてその少女はにっこりと笑った。

さらに広場に來ていた人々からは拍手が起こった。

その夜はなぜか眠れなくて、聖堂に座って月を見上げていた。その時、教会のドアから一人の少女が入ってきた。見覚えがあった。確か昼間、モスノ広場にいた子だったっけ。

「うん…。私の名前はシェレンベルグ ミーツェ。助けて…。」

よく見ると昼間見た真っ白な服は泥だらけでほっぺたには血がにじんでいた。

街で怖い人に襲われて逃げて来たらしい。

世界で一番平和なところって言われてたこの町が…。でもミーツェちゃんが言っていることが嘘だとは思えなかった。

僕はミーツェちゃんの手を取って星空を見上げてミーツェちゃんの安全のために祈りを捧げた。

祈祷師リナの祈り

祈祷が終わった時何を祈ったのか聞かれたけど本人の前で答えるのが恥ずかしくて秘密とだけ言っておいた。このまま街に帰すのは危険そうだと思って寄宿舍に案内した。部屋に戻る途中リナに会った。まだ起きてたんだ。ミーツェの話聞いてリナはとても驚いた。

次の朝目をさますと平和なこの国が嘘のように荒れていた。泣き崩れるリナとミーツェちゃん。それでも、それだからこそ祈りを捧げなきゃ。「あ、見つけた。」アルベリヒさんの声がした。その時ミーツェちゃんが僕の後ろに隠れた。手が震えていた。男の人がトラウマなのかな…。"モスノ祈祷広場に行こうとしたとき、アルベリヒさんに呼び止められた。そとにでるのは危険すぎるらしい。ミーツェちゃんに気づいたアルベリヒさんが声をかけた。まだ手は震えていたけどアルベリヒさんが修道士さんだってことを伝えたら震えはおさまった。昨日の混乱で街から逃げてきたことを伝えると驚いた様子で「そうかのか…。一体何があったんだ。街はすごい荒れ様だそうだ。」と言った。

僕たちは空っぽの聖堂で二人手を合わせた。もちろんこの混乱が収まることを願って。ずっと聖堂の中にいるのは退屈だ。それはリナもミーツェちゃんも一緒みたい。「散歩行こうよ！」とリナが無邪気に言うけど外でちゃダメだしと言うわけでリナの提案で教会の中を散歩することになった。鐘楼にも行くことになった。あそこ336段も階段登らなきゃいけないのにな…。と嫌がっているとリナがミーツェちゃんに耳打ちした。"「おねがいっ」そんなかわいく言われたら行かないわけにもいかず、鐘楼に向かった。ここからは街が一望できる。普段なら活気のある声が聞こえ賑やかな街の様子が見えるがけど、今日は…。やっぱり荒れてた。ミーツェちゃんは「うわー！湖がきれい」って感動してたけど。その背中をリナが押した。落ちるかと思ったよ。とミーツェちゃん。見てる僕も怖かった。リナは縁に座って手を離してた。平気だと体を揺するリナ。その時風が吹いてバランスを崩した。急いで手を掴んだけど間に合わなかったら落ちてたかも。するとアルベリヒさんが階段を駆け上がって来た。ジンボワニー地方が病気でほぼ壊滅だそうだ。また祈りが届いていなかった…。しかもよりひどくなっている。ここにきてから真逆のことが起こるときがある。でもそれはなんでだろう…。その次の夜は明かりを消すとすぐ眠れた。次の朝目を覚ますと、昨日の混乱が嘘のようだった。あれは夢だったって思うくらい街は活気を取り戻していた。でも、ミーツェちゃんの家は壊されていて、帰る場所はなかった。あれからしばらくたって、また願いが叶わなくなってきた。そんなある日国王のヴェンツェル五世が病に倒れた。僕たちは精一杯祈った、僕たちだけじゃない、みんなが祈った。でもよくならなかった。

ある日ミーツェちゃんが謎の高熱を出した。

祈祷師リナの祈り

本人は大丈夫と言うがろれつが回ってないしふらついている。

その日も空を仰いで手を合わせる。でも今日はミーツェちゃんのことので頭がいっぱいでなかなか集中できなかった。

何を願っているのか聞かれた時僕は嘘をついた。本当はミーツェちゃんの熱ことしか祈ってないけど、ここは首都の教会。そんなこと言えないしととっさに嘘をついた。

ここ何日も願いは叶ってない。その上悪くなる一方だったけど、望みは捨てちゃダメだよ。

部屋に帰ると見違えるほど元気になったミーツェちゃんがいた。

でもよかった。それに久々に僕の願いが叶った。

その日は安心してすぐ寝てしまった。昨日からミーツェちゃんが気になってねれなかった分が一気にきたみたいだ。

リナの声に起こされた。ミーツェちゃんと何か話していたみたい。レオって聞こえた気がするけど…。聞いたけど教えてくれなかった。内緒って言われると、さらに気になる…。

王都は今深刻な水不足状態にあった。それなのに何を願ったのかと言う問いに対してリナは「わ、私は…。この街に、日照りがもっと続くようにって。」と答えた。

雨は降って来た。

リナと真逆のことを言ったのは初めてだった。というかなんでリナはあんなこと言ったんだろう…。

聞きたかったけど聞けなかった。

次の日もリナは僕と真逆のことを言った。

広場にいた人たちも戸惑った。

部屋に戻る途中でアルベリヒさんに呼び止められた。

なぜリナがああ言ったのか問われたけどリナは冷たい反応をしてろくに何も答えれずに立ち去った。

でもきっとリナにはリナの考えがあるはず。

部屋に戻ってリナに聞いても答えてくれなかった。

そこにミーツェちゃんが帰って来た。

リナは作って元気に笑ってるけどミーツェちゃんもリナがおかしいってことに気づいてるよね。

「リナは本当はみんなの不幸を望んではいないよね？」

「…うん。…そんなこと望んでない」

「なら良かった。リナもみんなの幸せを祈ってるんだよね？」

「……それは言えない。」

なんで…。

またある日も何を願ったのか聞かれた時僕は皆が喧嘩せずに平和に暮らせるようにと答えた。そしてリナは犯罪が増えるようにと答えた。

今日は珍しく真逆のことじゃなかった。相変わらず悪い方に向かっているけど。

なぜそんなことを言うのか聞いてもやっぱり答えてくれない。

なんでだろう。

次の朝目が覚めるとアルベリヒさんが部屋のドアをノックした。

アルベリヒさんが持ってきたのはここ数日に起こった犯罪をまとめた書類だった。

愕然とした。昨日は喧嘩以外で警察が出ていなかった。

僕が願ったことは喧嘩がなくなるようにと、リナが祈ったのは犯罪が増えるように。

…逆だった。

あれ？僕の願いは叶ってない？

祈祷師リナの祈り

なんで？

そのあと、アルベリヒさんに何度か問われたけどリナは答えなかった。

ある日リナが捕まった。人の皮を被った魔女だつてさ…」

「そんな…」

リナは王都の端にあるシルバティ監獄に閉じ込められた。

小さな明かりとり用の窓があるだけの薄暗い独房には藁が敷いてあるだけの寝床があるだけだった。

その中でもリナは小さな窓から見える空に向かって祈りを捧げていた。

ミーツェちゃんと二人でこっそりと入ってみるとリナは小さな窓に向かって手を合わせていた。

「何祈ってたの？今は」

「ナイショ」またナイショか…。

するとドアの開く音。入ったことがバレたかな…。急いで二人でその場を離れた。

教会の鐘楼。前三人で来たっけ？高いとこのが好きなりナは危なっかしいことばかりしてたな。

ミーツェちゃんの背中押したり縁に座ったりとか。

アルベリヒさんが勢いよく階段を駆け上がってきた。なんか前に来た時もそうだったな…。

リナがあと30分で火あぶりになるらしい。そんな急な…。

広場に着くともうたくさんの方がいた。

歓声が起こってその方を見ると、一台の馬車が来た。

もちろんリナを乗せた馬車だ。

この前王都に来るとにき馬車に大はしゃぎしてたけど2回目の馬車がこんなことになるなんて…。

ミーツェちゃんが僕の服の裾をつかんできた。ミーツェちゃんも辛いよね。あの混乱以来ずっと同じ部屋で暮らしてきたリナが処刑される。とても11歳の子が経験するようなことじゃないな。

時計の時間は正午だった。いつも祈祷を始める時間に火あぶりにされる。

なんでリナが…。

「リナお姉さんは本当は…魔女…なんかじゃないよね」

「当たり前でしょ？でも…。」

でもそれじゃ何であんなことを言ったんだろう…。

「リナお姉さん！」ミーツェちゃんがリナに声をかけた。

「ミーツェちゃん…。レオ…。」僕たちに気づくと少し笑顔になって言った。

「レオ、ミーツェちゃんにくつつきすぎ、ずるい！…二人のびっくりした顔、面白い！」

作って明るくしてるのバレバレ。だけどリナと笑い合えるのはこれが最期なのかもしれない。

「…冗談はさておいて、ありがとうね。今まで。」

そんな縁起でもない…。って言ってももう助からないか…。リナは。

「僕こそ、ありがとう。」

「ミーツェちゃんも短い間だったけど、ありがとね」

「…そんなリナがお礼言うなんて……。そんなこと言われるよりこれからもずっと一緒にいたいよ！」

そう言って僕の服の裾に顔を伏せた。

「……ごめんね」

いつもは無い一本の太い棒。その周りによくべられた薪。

その棒にリナは縛りつけられた。

抵抗するそぶりを全く見せなかった。

小さい頃は何かするたびによく暴れてたのに…。

「いたたた…レオ歩くの早い！」つまずいて泣きそうな声で言ってきた。

膝も怪我してるみたい。

「痛い。歩けない！」駄々をこねるをこねて暴れてる。

「じゃあおんぶでもしようか？」そう言ってリナの手を持った時

「いやだ！下ろして！私の方がお姉ちゃんなんだからね！」って言ってまた暴れ出した

「じゃあ一人で歩ける？」家までもあと少しだし大丈夫かな

というかお姉ちゃんって言っても双子だし。

「…おんぶして」態度を変えて言って来た。どっちなの…。まったく…

その夜だって

お母さんに夕ご飯で呼ばれた時。

「あ、レオの方がおっきい！そっちがいい！」

「リナはお姉ちゃんでしょ？」さっき言ったことをいじわるで言ってみた。

「双子だもん」やっぱりそうくるか

「レオの方がいい！」

「暴れるなら夕ご飯抜きにしちゃうよ？」

「それもやだ！」

小さい頃は何かあるごとに暴れてたなー。

小さい頃…だけじゃないか。

アルベリヒさんに案内してもらって部屋に初めて入った時。

「そっちがいい！」いきなりでびっくりした。僕が何気なく荷物を置いた机が使いたかったらしい。

暴れる癖治ってないし…。まあ机は譲るけど。

今思うとどんな時だってリナと一緒にだった。

お姉ちゃんだからって言いつつ全くお姉ちゃんぽくないリナ。たまには嫌になることもあったけど、やっぱり一緒にいないと寂しい。

そんなリナは僕の目の前でくくりつけられてる。

もう、わがままなりナも、暴れてるリナも、甘えん坊なりナも、時には頼りになるリナも…………。

「レオお兄さん…。」

死刑人が来た。手には松明を持っている。

「最期に言いたい言葉はあるか？」

「レオ、私の机の引き出しに一通封筒が入ってるわ。それを読んで。」

遺言？かな…。というかそんなん用意してたんだ。

「それと、今は手を合わせれないけど…」そう言って目を閉じた。

「やめろ！」

リナの足元に火が点けられた。でもリナは構わず続けた。

「レオ、不幸になることを祈ってるわ！」涙をこらえながらそうリナは言った。

炎の中リナは苦しむそぶりを全く見せず笑顔だった。

なんでそんな顔ができるの？

「レオお兄さん…、」服の裾に顔を伏せたまま震えてるミーツェちゃん。涙でもうびちやびちやになっちゃってる。

もう見てられない。リナが炎の中で灰になっていく姿なんて。

## 祈祷師リナの祈り

部屋に戻ってリナの引き出しを開けた。中には一通の封筒。

小さく『ミーツェちゃんにも内緒ね』と、書かれていた。

泣き疲れて寝ちゃったミーツェちゃんをベッドに移して封を切った。

『祈祷師の3つの禁忌って覚えている？その第一の禁忌。願った願いを他の人に告げること。もし言ったら、それと逆のことが起こる。そうお母さんに言われたことを、私たちは今まで忘れていた。

そして聞かれるままに答えていた。

ミーツェちゃんが言った『思い出して』って言葉。それでこのことを思い出せた。きっとお母さんからの伝言だよ。

これから私は願ったことの逆のことを言う。どれだけ蔑まれようとも災いを起こすわけにはいかない。』

災いを起こしていたのは僕だった。

幸せを願い皆に言うことで僕は不幸をばらまいていた。

それをリナは必死に打ち消そうとしてくれていたんだ。

『第三の禁忌、このことは祈祷師以外が知ってはならない。知ってしまったら今までにない大災厄が訪れる。レオは優しいけど少し抜けてるところあるから、私の身に何かあった時に言わずにはいられないと思って言い出せなかった。でも私のことは何と言われようといいいから、わたしが命をかけて守ったことは守ってね』  
リナ…。

『本当はね、レオそしてミーツェちゃんに幸せになってほしいって思ってる。』

もしあの時忘れなければ、リナはこうならずに済んだのかもしれない。

6度目の鐘の音、夕方の祈りの時間が来た行かなきゃ。

モスノ広場に残る焦げた匂いはリナの亡骸の匂い。こっそりと遺灰を小瓶に入れた。"

茜空に向かって手を合わせる。リナのいない祈祷。どこか寂しい。「今日は何を願われたのですか？」

本当のことを言えば願いは叶わない。逆さのことが起こる。でも何か答えなきゃ。

「今日は、…。」